![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成２８年７月号

　園長　平澤　正則

年上のひとと年下の人の想い出　―私の４～５歳時の記憶―

　それは今から６０年近く前の話です。お前の昔話など聞いても仕方がない，というのも一理ありますが，ひょっとしたら参考になることがあるかも知れないという思いでお聞きいただきたい。

　はっきりと覚えていることが２つあります。その１つは，毎朝私の頬をさっと撫でていってくれた年上のひとの優しい笑顔，手のひらの温かさと柔らかさです。当時私の両親は貝地町の長屋で乾物や野菜などの商いを小さくしていました。幼稚園にも保育園にも行かなかった私の遊び場は家に面した路地であり，そこでは唯一の高級品，三輪車を毎日飽きずに颯爽と乗り回していました。２つ年上（小学校に入学した後知ったことです。）のそのひとは，ある日そこで遊んでいた私の頬を微笑みながら優しく撫でたのです。その時の思いはよく覚えていないのですが，それ以来，私は赤いランドセルを背負った優しい眼をした彼女が毎朝ほぼ決まった時間にそこを通り過ぎていくことに気づき，時間に合わせて今か今かと待つようになりました。優しくそっと頬を触ってくれるその瞬間が無性にうれしくて，毎朝道端に立ちました。遠くから近づいてくると頬を差し出すような気持で彼女の視線を確かめました。来ない日もありました。何日続いたかも忘れました。異性を意識した，といっていいのかどうか。その程度のことは初恋とはいわないのでしょうが，今も覚えている甘く優しい記憶です。

　２つ目は，遊び仲間の一つ年下のＯちゃんと二つ下のＫちゃんとのことです。時々一緒に遊んだその二人を，その日は初めて我が店の中に案内し，遊ぼうとしていたその時，振り返った私の眼に飛び込んできたその光景はやはり忘れることができません。あろうことかその二人は店の売り物であるガラスの大きな瓶に入った一枚１円のゴマせんべいのふたを開け，中からそれを取り出そうとしていたのでした。その瞬間はよく覚えているのです。

多分私はすぐさま父親に報告し，二人は叱られたように覚えていますが，はっきり覚えていることは，この二人を二度と店内に連れてきてはならないと悟ったことです。父親に叱られてそう思ったのではなく，自分でしかと認識したという記憶です。なぜ自主的に認識できたも覚えています。貧乏な店ですから両親は商品の一つ一つをとても大切にしていました。家で食べるキャベツは皮を何枚もむいた後の白いものでしたし，バナナといえば黒い，ミカンといえば必ずどこかは腐っている，そういうものばかり（少し大げさですが，それに近い記憶なのです）食べていたおかげで１枚１円のせんべいは私にとっても大切な売り物だったのです。それを目の前で盗られたわけですから，動揺は大きいものでした。そんな二人を大切な店の中に連れ込んでしまった私は強く後悔したのでした。そして今でもこうして当時の気持ちをはっきりとそのまま覚えているのです。

　昔話は以上です。三つ子の魂ではなく，４歳（５歳だったかも知れません）の魂です。何を記憶するかは人それぞれでしょうが，今私の目の前にいる園の子どもたちも何かしらを生涯覚え続けることだろうと思うと，楽しみ半分，怖さ半分。責任も感じざるを得ません。いい思い出を，いい記憶を残して欲しいと祈るばかり，では無責任と思われるかもしれませんが，こればかりはどうなるかわかりません。やはり，祈るしかないのです。